

【最近のこれはお見事!】『あの娘、早くババアになればいいの!』

血のつながらない少女を娘として育てる書店を営む男と娘と娘を好きな男と書店の定員

シネマズライフ

2014年6月6日発行 第62号

http://p.booklog.jp/users/rion-takagi

たかぎ りおん 貴樹 諒音

【最近のこれはまずいぞ!】『女子ーズ』福田雄一監督らしくお気楽な題名。まあ、『子ども警察』よりマシだが。

映画の風景 日本の風景

＊ 立山・室堂 ＊



昔・『二〇〇一年宇宙の旅』という映画があった。こんな映画だ。

太古の昔、地球には猿人猿達がたむろしており、猿人猿周走で争つたりしていた。特に水が少くない砂漠なため水飲み場の取り合いは熾烈なものだった。ある時突然、大きい黒い四角の物(モノリス)が砂漠の中に現れる。ある日、一匹の猿人猿がその四角の物の啓示を受け、動物の骨を武器にして敵対する猿人猿と戦い水飲み場を確保。啓示を受けた一匹は骨を投げ上げて勝利に喜ぶ……

そして、はるか未来の地球。月のクレイターに不可思議な物が発掘され、フレッド博士が月に向かう。不可思議な物とは、黒い四角の物で、驚いた事に木星に向かつて信号を発している事も発覚する……

18ヶ月後、一隻の宇宙船が木星に向かつていた乗組員はボーマン船長とブルー飛行士。そして、他の乗務員は睡眠カプセルで眠っていた。宇宙船を管理しているのは、『コンピュータのHAL(ハル)』。最初は順調に飛行させていたが、ある日HALは二人に奇妙な指示を始める……

人類が知恵をつき始めて、人間に成長する過程を見事に描き、これから起きるであろうコンピュータの反乱を予見しているのはさすがである。人類が生まれそしてまた、進化する……その先は見る人(人類)が決める事……そういう事を示唆しているように思える。

立山黒部の大地は、太古の昔から山々を従い人間を近づけなかつたという。この大地に四角の物(モノリス)が現れるとこの地球はどうなつていったのか? 考えてみるのも面白い。

『2001年宇宙の旅』1968年 アメリカ・イギリス 監督脚本:スタンリー・キューブリック 原作脚本:アーサー・C・クラーク 出演:ケア・ダレー

スタンリー・キューブリックは映画監督の中でも映画に対する態度は鬼気迫る物があり、この映画には多く科学者を集めれ当時最新の科学考証が使われた。

人間は結局、目で見えた事しか信じない?件

昔・スプーン曲げで一世を風靡したユリ・ゲラー。彼は、アメリカのカリフォルニア州のスタンフォード研究所で科学者達の前で『超能力』を目の前で披露して見せ、科学者を達を信じさせた。しかし、後にマジシャンのバナチエックが、科学者の前で『超能力』を見せて本当の『超能力者』と認定させ、後に『トリック』と公表。この『事件』がきっかけにアメリカでの研究は下火になった。



といつてその政治家がよい政治をするワケでもないのだが……

人間つて不思議な物。『リアル』というアイテムを使い、それを真実だと思つてしまふ人もいるのだが、一方、その裏側を知ろうとする人間がいるのも確かだ。

『超能力』を信じているようで、やはり目の前で起きた『リアル』な事は信じてしまふのだらう。

また、政治家が当選する事で一番大事な事はなるべく多くの選挙民と『握手』という『リアル』な方法を主張する政治家もいるが、『握手』をしたから

ユリ・ゲラーなんて信じない。映画は映像の嘘。UF ○だって本物もあるかもしれない……日々そんな事を考えているひねくれ者も多い。

『目で見えた事しか信じない』人もいれば逆に『目で見えた事は信じない』もいるし、どっちもテキストに信じる人もいる。そのバランスのよさがあるから人は生きていけるのだらう。

すると、社会は『正直者』と『ひねくれ者』で成り立っている? そんな事を考えながら『リアル』を探してみるのも、私・『ひねくれ者』の今後の楽しみにするのにも一考かもしれない。

★【最近のこれはお見事!】は見事な映画の題名の紹介、反して【最近のこれはまずいぞ!】は「これは、まずいぞ!」と思う題名を紹介しています。

